

投稿規定 (平成五年六月一日改訂)

- 一 本誌に掲載する論文は医史学研究に貢献しうるもので他誌に未発表のものとする。
- 二 投稿者の資格は共著者も含めて本学会会員とする。ただし編集委員会が特に認めたものはこの限りでない。
- 三 原稿の区分は、原著・総説・研究ノート・広場・資料・紹介・消息等とし、その採否は編集委員会が決定する。原著・研究ノートは編集委員会の委嘱する審査委員が査読し、それにもとづいて採否および区分を編集委員会が決定する。
- 四 執筆要項
 - a 原稿は二〇〇字または四〇〇字詰め縦書き原稿用紙を使用のこと。ワープロ(縦書)の使用も可。一行は二〇字または四〇字とし行数を原稿に記すこと。
 - b 原著・総説・研究ノート・広場・資料の場合は、欧文表題・ローマ字著者名を原稿の末尾に記し、原著および研究ノートにおいては欧文抄録(二五〇語以内)とその対訳和文を添えること。
 - c 欧文題名・欧文抄録での日本人名の表記については、五 外国語原稿のe項に準ずるものとする。
 - d 原稿の末尾に著者の所属および連絡先を記載すること。
- e 表記は原則として常用漢字・人名用漢字以内で、新かなづかいを使用する。難字は欄外にも楷書で別記する。外国人の人名・地名は、よく知られたもののほかは初出の箇所原綴またはローマ字を添えることが望ましい。
- f 図・表は明瞭に書き、写真は原則として白黒の紙焼きとする。裏には著者名・番号・天地を明記し、挿入位置を原稿中に明示すること。
- g 注・参考文献は末尾にまとめ、本文初出順に算用数字の通し番号(1)、(2) …をつけて、照合の便宜をはかること。
- h 参考文献の引用の仕方は、
 - ① 雑誌の場合は、著者名・論文題目・雑誌名・巻・号・頁・年次(西暦・和暦いずれも可)の順に書く。
 - ② 単行本の場合は、著者名・書名・該当頁・発行所名・発行地・年次を記載する。
 - ③ 編著書の場合は、著者名・論文題目・著者名(編者名)・該当頁・発行所名・発行地・年次とする。
 - ④ 古文獻の場合、江戸時代以前の国書については、原則として、編著者名・書名・成立年・刊行年(もしくは抄写年)・発行者名・発行地など、必要ならば該当丁(葉)あるいは頁数もしくは項目名を記し、稀覯本については所蔵者名も明記すること。清代以前の漢籍(和刻本・日本写本も含む)についても、前記に準ずる。

(例)

【雑誌】宗田 一「司馬江漢の西遊をめぐる」『日本医史学雑誌』三〇巻四号、四二五〜四三一頁、一九八四(昭和五十九年)

四(昭和五十九年)

【単行本】富士川游『日本医学史』五四頁、形成社、東京、一九七二(昭和四十七年)

【編著書】大塚恭男「中国医学の伝統」村上陽一郎編『医学思想と人間』(知の革命史)六三〜九四頁、朝倉書店、東京、一九七九(昭和五十四年)

五 外国語原稿

a 外国語原稿は、原則として英語・独語・仏語いずれかとする。

b 外国語の原稿は原則として、一行約六五字、一頁に二五行、ダブルスペース(一行おき)で印字する。

c イタリック・ゴシック・ギリシヤ文字等はかならず朱筆で指定する。

d 日本語・中国語を欧文表記する時は、初出の箇所に漢字を付記する。

e 日本人名を欧文表記する際には原則として名を先に、姓を後とする。ただしそれが不自然な場合はケース・バイ・ケースで扱って差し支えない。

f 中国語の欧文表記は、現代中国語音のローマ字綴り(ピニン式)とする。引用文献がウェード式の場合は、この限りでない。

g 注・文献・図表については、和文原稿の規定に準ずる。

h 題名中に書名が出現する場合は引用符「」で囲み、イタリック体を使用しない。

(例)

【雑誌】Nutton, V.: Galen in the Eyes of His Contemporaries. Bulletin of the History of Medicine. 58: 315-324, 1984.

【単行本】Temkin, O.: The Falling Sickness: a History of Epilepsy from the Greeks to the Beginnings of Modern Neurology. 2nd ed. 25—40, Johns Hopkins University Press, Baltimore, 1971.

【編著書】McC. Brooks, Ch. and Levey, H. A.: Humorally -Transported Integrators of Body Function and the Development of Endocrinology. 183—238 in McC. Brooks, Ch. and Crane field, P. F. (eds.): The Historical Development of Physiological Thought. Hafner, New York. 1959.

六 投稿原稿は「コピーを一部添付すること。原稿は著者校正の際も原則として返却しないので、手元にコピーを一部残すこと。

七 著者校正は、原則として原著・総説・研究ノート・広場・資料を対象とし、初校のみとする。校正は印刷上の誤植を訂正するに留め、原稿の改変や、その他の組み替えは認めない。校正刷りの返送期日を厳守すること。期日ま

でに返却されない場合は責了とみなす。

八 刷り上がり一〇印刷ページ(四〇〇字詰原稿用紙で二四枚)までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九 論文別刷は五〇部単位とし、実費で作製する。別刷希望

編集後記

冒頭から私事で申し訳ない次第ですが、昨年末に頸部腫瘤の手術をうけました。

入院中にあれもしよう、これもしようと思定していましたが、二時間半の手術の割に六日後に退院させられてしまい、遂に何も出来ませんでした。寒さの中、抜糸のために通院という仕儀でした。

この様なことで、編集委員会もとうとう四ヶ月もお休みしてしまい、全く委員会の議論の流れを知りません。かようなものが、編集後記、しかも総会のための抄録号の後記を書くのもいかがかと存じますが、執筆は輪番となっていますのでご了承ください。

毎年のことながら、この抄録号は各編集委員に約十三演題分の原稿と校正用ゲラ刷りが渡されて私共の編集作業がはじまる。

者は校正刷同封の申込書に部数を明記すること。

一〇 原稿の送り先

〒二三一八四三 東京都文京区本郷二丁目一一一

順天堂大学医学部医史学研究室内

日本医史学雑誌編集委員会

その段階で字数のオーバーや横文字のはつきりしない原稿であると作業のスピードはぐつと落ちてしまう。今日はFAXという便利な機器で大助りではあるが、大先輩の原稿を勝手にけづれないので、苦心して字数枠におさめる等、かなりの苦しさを感じるのである。

外国語の苦手な小生にとっては、ラテン語、フランス語、オランダ語などが、ぶらぶらと続くと結局辞書をひきつつ校正をすることになる。読めない字がある時の困惑は予想を上まわるものである。三十年ほど前、役所から、もう少しきれいな字を書いて下さい、といわれた先輩が居られたが、その様な失礼は申せない。二十一世紀が目前にせまった。全原稿がワープロ打ちで出来上れば、愚痴は非常に少くなる……。

(中西 淳朗)